

## はじめに

筆者が「教会教育」という言葉を耳にしてから、どれほどの時が経ったであろうか。

我が国が第二次大戦に敗れて後、のち教育という取り組みを一つの柱に据えて新たな国づくりに着手したのはごく自然なことと言えよう。国の形が変わるといふ、大きなそして何より本質的な変革にみまわれて、それまでのあり方を漫然と引き継ぐことは体制のいかんを問わず、いかなる社会においても考えられない。それはとりもなおさず社会の全体を支える価値観の変容を意味するものであり、そこに生きる人々は今度は、変容を遂げたその新たな価値観に基づき、それに押し出されて先々のあり方を構想するからである。それは、ひとり政治思想や社会観のあり様にとどまらない。むしろ、それらを支えて生み出す幸福観や人生観に根を持つものであり、さらに言うなら、より根本的な人間観や生命観にまで遡ると言えよう。価値観の変容とその受容、展開というそうした広範かつ深みのある現実と課題を前にして、教育という取り組みが不可欠なのは言うを待たない。事の問題点を見極め、理解し、そして考えを深める。そのように思索する行為を各人の体質にまで根付かせるには、的を得たその地道な営みが欠かせない。それを、戦後の日本は民主的なあり方のもと、上意下達の全体主義的調教としてではなく、平等な個々人の主体的・相互的研鑽としてなそうとしたのだった。

そうしたなか、教会もまた、戦後の新たな時代に歩を踏み出した。それはたしかに、国家の体制変換というほどのものではなかったかもしれない。そこには、か細く弱々しいながらも、それ以前とそれ以後を繋ぐ聖書というものがかろうじてあったからである。しかし、再出発を期する社会の息吹をその身に感じながら、教会もまた、過去からの出直しを図ったことは間違いない。バルト神学を中心とする様々な神学の紹介とそれらの学習、深化がそれであり、平和を希求する社会倫理の探求と啓発もまたそれだった。戦前・戦中における自らのあり方を省みるとともに、そこからの出直しを企図したのと言えよう。新たな時代精神ともいふべき息づかいが、社会にも教会にも漂っていた。そして、社会と同様、教会がそこで力を入れたことの一つが、いわゆる「教育」と呼ばれる取り組みでもあった。

それは教会においてもまた、広がりや興行きのあるものであり、適切にして堅実な取り組みを求められるものだった。というより何より、教育とはそもそもそのようなものではないだろうか。とりわけ、信仰の「受肉」ということを重く受け止める者たちにとって、それは軽々にやり過ぎすことの

できないものであろう。なぜなら、受肉とは換言すればすなわち「体質化」ということであり、体質と言えるほどに事が人の内に溶け込んでその血肉と化するには、時間的にも内容的にもしかるべき積み重ねが必要になるからである。一朝一夕というような魔法の言葉は、そこにはない。しかも、それが（筆者もその一員である）バプテストのような教派においてはなおさらと考えられる。牧会的特質として万人祭司性というプロテスタントの伝統を受け継ぐとともに、教会政治において会衆制をひととき強調するのがバプテストである。そして、それらすべての出発点として、信徒の一人ひとりが自分で聖書を読み、理解し、そこから信仰の語りかけを聴き取っていくということ。バプテストは目指すべきところとして、そのことを前提ともしてきた。つまりは、聖書という土台に足をしっかりと据えて、一人ひとりの各人が信仰者としての歩みをそこから形づくっていくこと。そのことを、これまた聖書で建てられている教会という相互の交わりと研鑽の中で行なっていくこと。このような個々人の信仰的広がりや深まりとが聖書の共同体において目指されているのがバプテストというところではなからうか。だとしたら、そのための取り組みは社会がそうである以上に、さらにも増して的確かつ地道なものでなければならぬと言えよう。いわゆる教会教育にも間違いなく、その一端を担うことが期待されている。

\* \* \*

しかしながら、戦後七十年を経た今日、こんにち現実をはたしてどうであろうか。期待に応える熱いものが、静かながらも教会に漂っているだろうか。なかんずく、教会教育という営為に、それは感じられるか。例えば、「聖書を読む」というそもそものことに、私たちは今、どんな思いで向き合っているだろうか。キリスト教の信仰であり教会であるいじょう、それらのすべては当然ながら、聖書から始まり、聖書に基づいて展開されていく。七十年に及ぶ戦後の歩みは本質的な言い方をするなら、あくまで聖書を中心の軸として展開されたという意味で、あれこれの分野を越えて、その全体がそもそもこうした流れの延長線上にあったと言っても過言でなからう。それはまさに聖書を読むということであり、その読み方を磨き深めて、そしてその理解の仕方をも身につけるということであった。すべての基本たる、聖書を読むということ。このこと一つをとっても、それが形だけのお勤めに墮することなく、生気に満ちた生き生きとしたものになっているか。例えば、そう自問させられるのである。

\* \* \*

本論のタイトルを「いま一度考える『教会教育原論』」とつけたのは、こうした問題意識からである。それは言うまでもなく、聖書を読むということから出発するものの、意識の視線はただそこに

内向きに留まるものではない。教会の隅々へと、そして生活の隅々や社会の隅々へと、それは必然的に広がらざるをえない。ただ、この論考では、そのような広がりを持つ信仰の事柄を「教会教育」という概念から、さらにはその「原論」という次元から考え、論じたいと思っている。それをなおかつ「いま一度考える」というふうにして、従来の教会教育という既成概念を見直し、土台となるその枠組みを再構築できればと願っている。

そこにあるのは次のような問いであり、課題である。

一 そもそも、「教会教育」という概念がはたしてどれだけ明確に規定され、どれだけ共通に理解されているか。言葉を換えれば、教会教育というものの定義と共有の問題である。教会の本質とはいいたい、いかなるものなのか。教育とはそもそも、何なのか。そして、何をもって教会教育と叫ぶのか。教会が行なう教育ということか。それとも、教会における教育か、教会のための教育か、教会を通じた教育か・・・云々である。事柄の出発点とも言うべきこうした点が明確にされず、曖昧なままに置かれていることから、教会教育の矮小化ということが起きていのように思われるのだが、いかがなものだろうか。教会学校（と、せいぜい研修会や勉強会だけ）がイコール教会教育と見なされたり、デイダケー（*Didaxhē*, *διδασκαλία*。通常「教え」と訳される）は教育だがケリユグマ（*κρίθρημα*, *κρίθρημα*。通常「宣教」と訳される）はそうではないとされたりする。そのようなある種形式的で観念的に過ぎる教育の捉え方に、組織化や態勢といったいわゆる名目や形に偏りがちな教会の理解が相まって、教会教育から本来の生気が薄れつつあるように感じられる。すなわち、教会教育の再定義の課題である。

二 これとあわせて、これと同時にせねばならないのが教会教育に携わる際の神学的基盤の探求であり、それとの関連における哲学的理解の明確化と言えよう。前項の「一」共々、このようないわゆる「原論」的基盤が把握され納得されて初めて、本来、プログラムや手法といった具体的ハウツーが生まれてくるのではないだろうか。でないか、それらはちぐはぐで一貫性のないものになり、時に結果として、気づかないままに相矛盾することがなされるようにもなりかねない。自主的な聖書読解の奨励がその勝手な読み込みを後押ししてしまうこともあれば、逆に、牧師等による聖書講義への傾聴促進が自立した聖書学習の衰退を引き起こすこともある。また、理解の足りない自立の推進が協力の拒絶を生むこともあれば、逆に、浅薄な協力のキャンペーンが権威主義と従順の押し付けに繋がることもある。いずれも、一貫性のある原論的基盤がそこに存在しないからである。

三 これらの基を押さえたうえで、社会科学等の学際的知見にも耳を傾けることが必要なのではなからうか。客観的事実という自己規制の枠を安易に越えて事を決めつける向きのある科学主義ではなく、

事実に謙虚に踏みとどまる 真にその名にふさわしい諸科学の学際的知見である。信仰としてそもそも、事実を無視するそれは妄信と呼ばれても、また盲信と呼ばれてもいたしかたあるまい。聖書の信仰は神の奇跡のそれではあるが、しかし妄信や盲信ではない。

四 このようにして、教会と教育に関わる基本的理解のもと、日常の具体的場面への展開に至るまで構想するのがすなわち「教会教育」の務めであり、課題と言えるのではないだろうか。筆者はそう考えている。

\* \* \*

そこで、これから論じる本論の構成を概略、以下のような章立てにして進めたいと思う。言うまでもなく、学びながら書き下ろしていくわけで、予定の修正・変更は多分に予想される。御了解いただきたい。

- 一 教会教育というものの捉え方、論考の土台たる哲学的枠組み、人間存在の基本的捉え方
- 二 教会教育の再定義①「教育とは」
- 三 人間の営為としての教育と神の働き、信仰とは？ 教育とは？
- 四 教会教育の再定義②「教会とは」
- 五 教会教育の再定義③「教会教育の目指すところ（その哲学的前提と具体的方向性）」
- 六 個々の場における教会教育の実際
- 七 教会総体としての教会教育、共有の価値観、焦点とその具体化
- 八 教会教育と隣人性、社会性
- 九 教会教育と生命倫理、まとめ

一瞥ひとくちしてお分かりのとおり、どれ一つをとっても 主題として小さなものはなく、各章とも 容易でない論考が求められる。筆者の手に余るものばかりである。その意味で、本論は何にも増して、筆者の思索を整理し深めるための試みと言える。今後の展開がどんなペースで進み、最終章にいつ至るのか、確かなことはいまだ不明である。頭の働くうちに終わることができればと願っている。とりあえずは一年に一章のペースで、ゆつくりと進めたいと思う。原稿掲載の時期としては、毎年十月ごろを予定している。

書き下ろしにあたっては、事柄の本質的・中心的ポイントを、的を絞って、筋道を立てて、分かりやすく、かつ内容を薄めることなく引き下げることなく論じていきたいと考えている。教会教育という学びの長旅を御一緒に歩いていただけたら幸いである。

第一章の掲載は、本年の十月ごろを予定している。